

「ROIC（投下資本利益率）」

2020年7月の新聞に「ROIC 5年ぶりに低水準」との記事がありました。この「ROIC」について説明します。

1. 「ROIC」とは

ROIC（投下資本利益率）とは、Return on Invested Capital の略語で、「企業が事業活動のために投じた資本（投下資本^{*1}）に対して、本業でどれだけ効率的に利益を上げたか」を測る指標です。数値が高ければ高いほど生み出された利益が大きいことを示しています。計算式は下記のとおりです。

$$\text{ROIC} = \text{税引後営業利益} \div \text{投下資本}^{(*1)} \times 100$$

企業は、部門ごとの ROIC を算出することで稼ぐ力を知ることができるため、設備投資、営業戦略、コスト削減、不採算部門からの撤退などの判断材料として使うことができます。一般的に、企業は資金の調達コストを上回る ROIC を生み出す必要があるため、借入金の金利、株の配当、株の値上がり期待などを数値化した加重平均資本コスト（WACC^{*2}）と比較して利用されることが多く、WACC を上回る ROIC が求められています。

※1 投下資本の図解

(1) 運用側から見た投下資本

売上債権	仕入債務	↑ 投下資本
棚卸資産	正味運転資本	
固定資産	固定資産	

(2) 資金調達先から見た投下資本

総資産	その他負債	↑ 投下資本
	総有利子負債	
	純資産	

(1) 投下資本 = 固定資産 + 正味運転資本（正味運転資本 = 売上債権 + 棚卸資産 - 仕入債務）

(2) 投下資本 = 総有利子負債 + 純資産

事業別の ROIC 算出の場合は(1)の方法、連結ベースの場合は(2)の方法で掲載することが多い

※2 WACC（加重平均資本コスト）とは、会社の資金調達に伴うコスト（費用）のことで、株主資本コスト（自己資本コスト）と負債コスト（他人資本コスト）に分けられます。

2. ROIC 経営

ROIC が、企業の稼ぐ力に直結し資本市場を意識した経営指標であることから、経営の重要指標として ROIC を重視する企業が増えています。下記がその企業の例です。

【図表1】ROIC 経営を取り入れている企業の例

アサヒグループ HLDG (2502)	オムロン(株) (6645)	日本航空(株) (9201)
(株)荏原製作所 (6361)	川崎重工業(株) (7012)	ビジョン(株) (7956)
ENEOS HLDG (5020)	(株)ニコン (7731)	(株)三菱ケミカル HD (4188)

4桁の数字は、東京証券取引所の銘柄コードです。

閑話ひとつ

- ▶ 激動の令和2年も残すところあと少しとなりました。1月の新型コロナウイルス国内初確認に始まり、4月の緊急事態宣言発令、11月にはアメリカ大統領選挙とその混乱。本当に大変な世の中になってしまったなと思わずにはられません。
- ▶ 中間層の崩壊にともなう貧富の格差拡大が、人種問題と相まって人々の分断を引き起こし、民主主義を揺さぶっています。これはアメリカだけに起こっていることではなく、日本も含め世界中で起こりつつあることのように思われます。
- ▶ 金融財政ビジネス9月3日号にコラムニストの須賀努氏が「色鉛筆から考える」という文章の中で、現在の色鉛筆には「はだいろ」という色はなく、「うすだいいいろ」がそれに該当すると書いておられました。「はだいろ」と呼んでいた世代の小生も早速文房具屋さんで色鉛筆を確認してみました。まさにその通りで少し考えさせられました。
- ▶ キング牧師が1963年に行った有名な演説「I Have a Dream」から57年が経ちました。彼が今の世界を見たらと思うと辛い気持ちになります。
- ▶ 少し暗い話題になってしまいましたが、今年1年「福島の進路」をご愛読いただきありがとうございます。皆様にとって令和3年が良い年となりますようご祈念申し上げます。 (TA)